



假名垣魯文撰圖

疵傷きず

於石かた

冬之兒ふゆこ立た闍あ鴉くろ

初編はつぺん

系文舍文系著述

中川周、重画図

梓生青盛中 加賀吉登兌



35

30

25

20



假名垣魯文校閱  
京文舎文京著述

上

A486  
/

<48-8270>



子中こ  
見立

閑話結

初編上の巻

假名垣園

京文舎綴

周を画

かき書

考梓

疾傷  
於石文  
閑話結  
初編之序

合巻冊の筆を棄て世の流行は遅色。壯年輩に煽動され又江湖上は  
現色。老の学びの新聞記者有名無實の猫福長者持べき者ハ子  
寶の子で子に非ぬ驚馬弦卯の中乃麻公天遍のひて著述の才筆笠  
不縫ふ梅の花彼難波津の詠歌に縁み。深き浅香山の井。乃は新聞の  
影汲める京文舎が繁札の同本紙の補闕と書足して花実全き三巻冊  
之を開せば木梢の泉聞の輝く看官の活眼と便りに進まは勉勵ハ  
文京子の豫て試せ。腕力再所を保証を

明治十三辰春

金花猫公羽會文漫題





淫婦於石

萬人足  
白龍の金藏



水名未詳

水名未詳



冬兒立闇鳩初編之上

假名垣魯文 校閱  
京文舎文京 著述

馬鹿をわしの音へ遠く中川の海は小ひびき舎見の揺ふ桶甚九  
 由声濁らせ七幽うにききあ今夜へ村の氏林の田舎芝居に  
 素人相撲今日一日の骨休め深う桐子の囁声もそや告後白  
 初更の後の者各自家路やあろさしあひく小降りゆく夜に  
 窓より物凄しく時を待つ小威家の窓戸はうらなひ一人の男  
 手織本物の被衣を足さぬらひ目あふ小顔うむ至小石をさる  
 ねあしの原志をうく停むむその折うら戸を引のけて立出るは  
 家のむさめとあわしき年のは十七八鄙小締るる弱女を灰へ



引合えぬて長  
 月夜雨く音  
 尾の髪  
 の髪きの  
 糸の  
 後家内  
 藤入りも  
 母の

連て雲  
 入る  
 抑も  
 三人  
 上巻の  
 西茶食  
 町る  
 六右衛門の二女  
 お石と因阿の者  
 人は合巻の次へ



袖の  
 お慶  
 婿の  
 夫と

せは  
 フンと吹消さ

と共  
 婿  
 婿

お石



何時の令  
 花と通下合  
 ぬ秋の目と  
 窓合をるる  
 放後へ父の  
 六右衛門の  
 写知りア  
 宿務沙と  
 六後のの  
 一々行く  
 折うを  
 出入を

石井と  
 後つ  
 結納  
 届うへ  
 嫁入りの  
 定ま  
 茶一  
 以事  
 知  
 頼進



二入  
 容  
 番  
 ねと生性  
 玉て  
 振れ  
 今  
 世  
 娘  
 石  
 井  
 へ  
 ぬ  
 兄  
 父  
 母  
 中  
 田  
 元  
 如  
 何  
 の  
 兄  
 磨  
 の  
 兄  
 夜  
 守  
 の  
 兄  
 石  
 井  
 の  
 兄  
 人  
 と  
 仲

妹介  
 某へ  
 中田元  
 如何の兄  
 磨の兄  
 夜守の兄  
 石井の兄  
 人と仲

つき六のあつ

きびなれが

一寸の間も

外へおきだすの

たうりの屋も

繰えむの

の痛

あつもの

あれど

浪石ふ

おとつひ

おし子時

の久委一く



けい女

小持

甘を密り

小全流

の海

届け

まを

やを

石井へ

暖へ

暖へ

暖へ

今宵を  
暎と名飾り  
白羽二重の重なる

お後一押しませうト

さくさくと

ゆめがたふ

二入の中

七知



ひきそ

まや

婚姻

のあ夜

とありん

さかねか

をりおに

余あま

あま

嫁入をれど

つと道々

祝儀の小徳次へ

たのこ





お石の首へいふまであく  
 舞の舞のそゆ係へ  
 笑つてゆくかきさか  
 一ろト大敷あけて吐ける  
 由お石井の致るに文許に

お石の  
 婿  
 定めの度  
 抽とまきでの仕業

お石の  
 婿  
 定めの度  
 抽とまきでの仕業



お石の首へいふまであく

お石の婿  
 定めの度  
 抽とまきでの仕業

お石の婿

お石の首へいふまであく

お石の婿



保命  
 以手  
 居方  
 持おく  
 こけ木  
 中さねが  
 怖く  
 合飛小  
 對以釋  
 と寄め

湖と事  
 不婦と  
 出せ

親  
 の

石井  
 これ



始末  
 今  
 併  
 小  
 成  
 發  
 志  
 不  
 得  
 機

切  
 一  
 金  
 小

何

何  
 今  
 一  
 便  
 下  
 女  
 女  
 女

石井

不登 象儀

首尾

交輝

あつこ

が是

お石

身

情

夫へ

大田

小仕へ

る中

月日

に冥

る二

奉

極過せ

お石の一人の

女の子を奉け

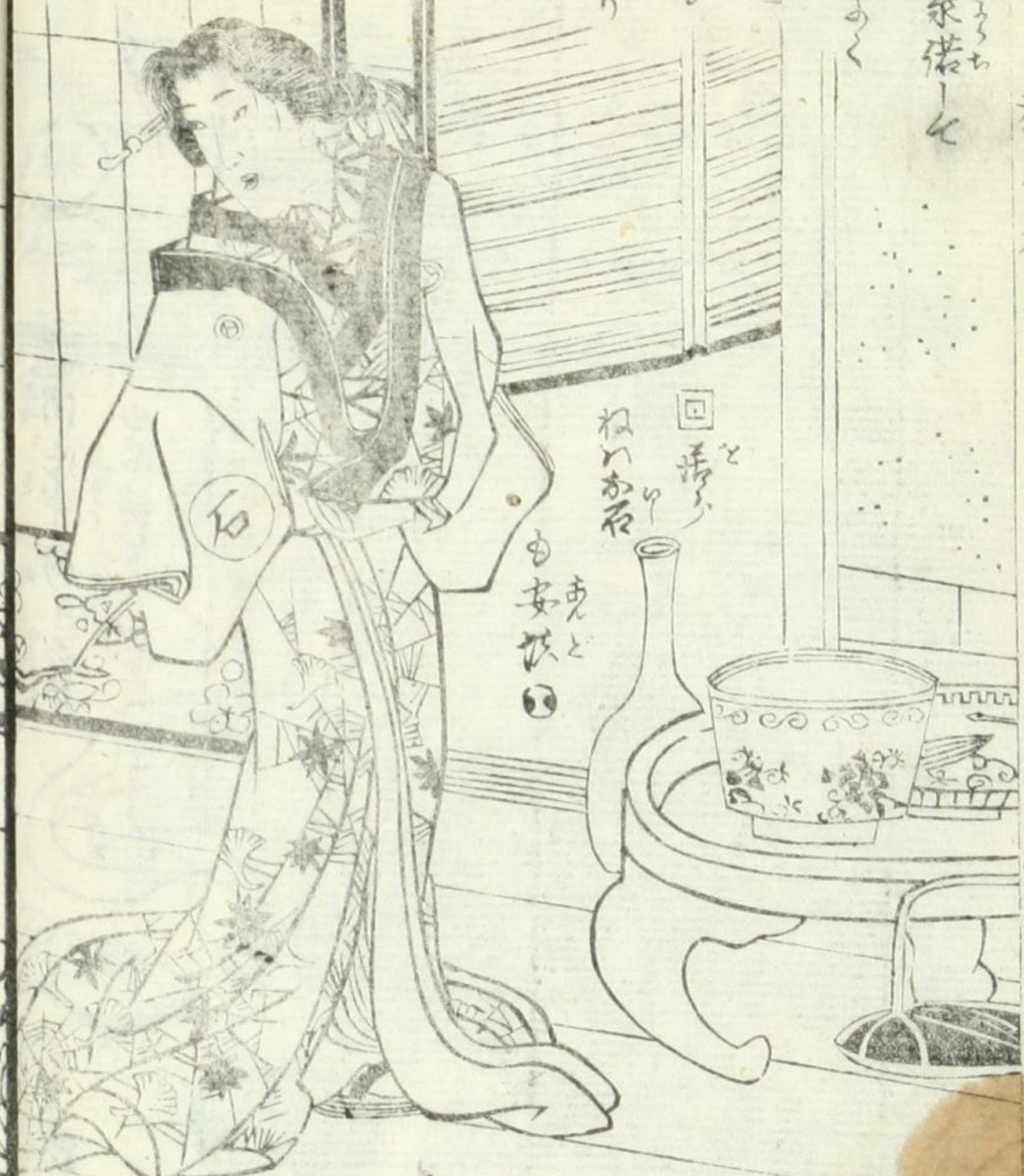
名とおとくと

あけ

お月とに

あじ

受とつて



ねいお石

由安

仕

又

又

又

又

又

又

又

又

櫛



文京綴  
周重画

花の香りにあふれる夕暮り  
あやうそいふ中々外へも  
寺の故田山不勅等の閑帳  
ありて旧和つねの振まひ小  
あつちの如女思おもて  
つは小女と供にあらん  
彼寺に系指あつた  
香いを吸ふ踏次人は無常  
わつちの如くわつちの中へ

藻汐草近世奇談

初編より  
引續出版

松飾徳若譚

六編より  
追て出版

今朝の春三組盃

三編より  
追て出版

御届  
明治十一年十二月十七日  
神田區仲町二丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

日本橋區米沢町一丁目七番地

東地水錦繪問屋  
出版人 堤吉兵衛



まがらき

ろくろ

おひし

文系綴

冬兒立

周重画

やみり

赤岩

ふくろ

初編中



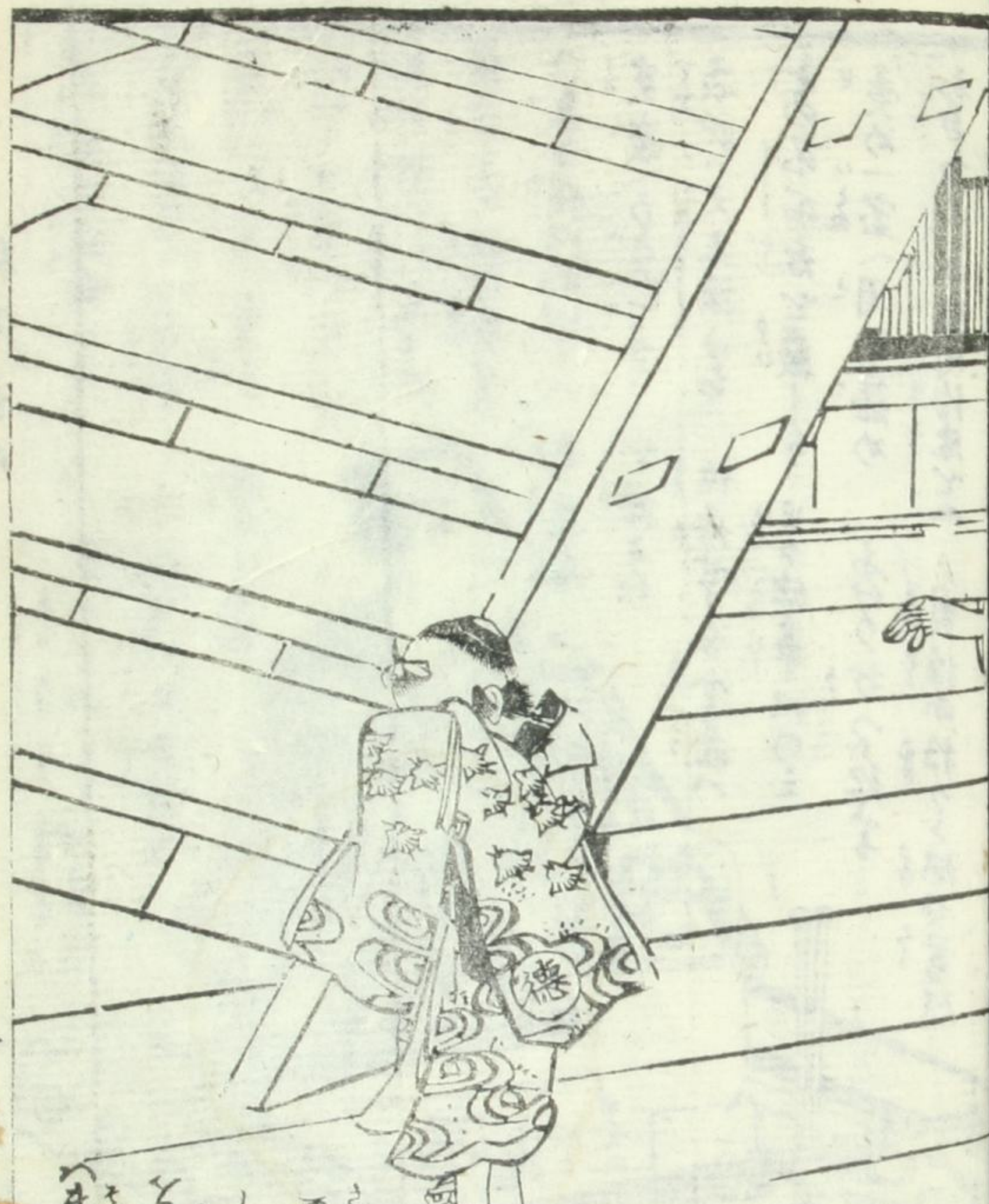
冬兒立闇嶋初編中之巻

假名垣魯文 檢閱

京文舎文京 編輯

徳和の過るまの暮にさる妻と更と名赤金の石井系ハ往本が娘おひしを  
 要里誓れの夜も金鹿が暴走と追たる不品行の雑縁の行事を為され  
 ぶも初本夫婦が影とのひね返中う事こけて初めハ下小の断りうの  
 跡石井系ハ近て徳和の性質由忍皆杖拘で堪忍居あつて事をさるるこ  
 りまはりの後ハ二人が中にと睦まどくはるにわさる女子と挙げ終末  
 夫婦も安堵して初孫をわさる愛し互に小姓床の及級をさる家  
 の中も和合せハ慈雨お石が身を窮以結婚を引出せハはりて破田の  
 開帳のどりに系帯再び金鹿不智かけられて驚きハが遊人とまされ遊  
 さるを強て遊意引とる先も暴走業も為る系ん令花が勢以放浪ハ

たてのり



運水船云  
 只度橋  
 枕のつれずく  
 おりへ帰さ  
 由おら手止  
 又由帰し  
 再合のせめと  
 七まの目録  
 と忠ひまを白井  
 八まらま坊り 灰へ



心るるば目付まふれ  
 て感の料理座へ玉りか  
 きある酒も一物のあると都  
 ねむ 帰さのまき三ツ

四ツまある  
 酒盆小盆うさ  
 打出は漆婦  
 の情物  
 風は  
 鬼の  
 眼先の操  
 笑は方ハ  
 志めごと  
 とうそふ  
 て静々

遠小齋縁とさうろが 町小遊亭の沙茶辺に

けと死おろくへ商幕 合箱が柳の如きと

あれは五才に身と 傍り中

おひつが書ひその人

石井芳へ引馬の

約束やにけしきさう

○表る程にわりの

実家へりどりより と借らけ

お親の文を扱とち 恒長せし金巻の

その不両意と嚴しく 日々様事へのこ

責め一室へ困お給め おひつおつたさる

おきたりの何何約束と 負板おおろくほで書け



何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何



せとろ素粧の

全箱と手にて

と懐ちて

或日か

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何

何何何何何



いかにいかに金花と

相談の久おき

と内辰形宿の或る

欄へ来後せしがまゝ五才

後の事さればあつてに金

貸さず彼は是に居るちその

金由貸入之辨つた

と又一ふりあり

殆んど困りか今

の外に冷めされへ

金花が赤右に飲うと



性根の娘  
昔は七層  
申すも幼を  
まがら由  
あまの徳  
心配に勤めを  
いひ  
おと  
長谷川  
のへあま米海町  
小ま町方の子  
先物わる



徳  
池田  
物  
風は揺る  
母持の女由  
愛のまがら

遂に内辰形宿のむくが

いかにいかに金花と

欄へ来後せしがまゝ五才

後の事さればあつてに金

貸さず彼は是に居るちその

金由貸入之辨つた

と又一ふりあり

殆んど困りか今

の外に冷めされへ

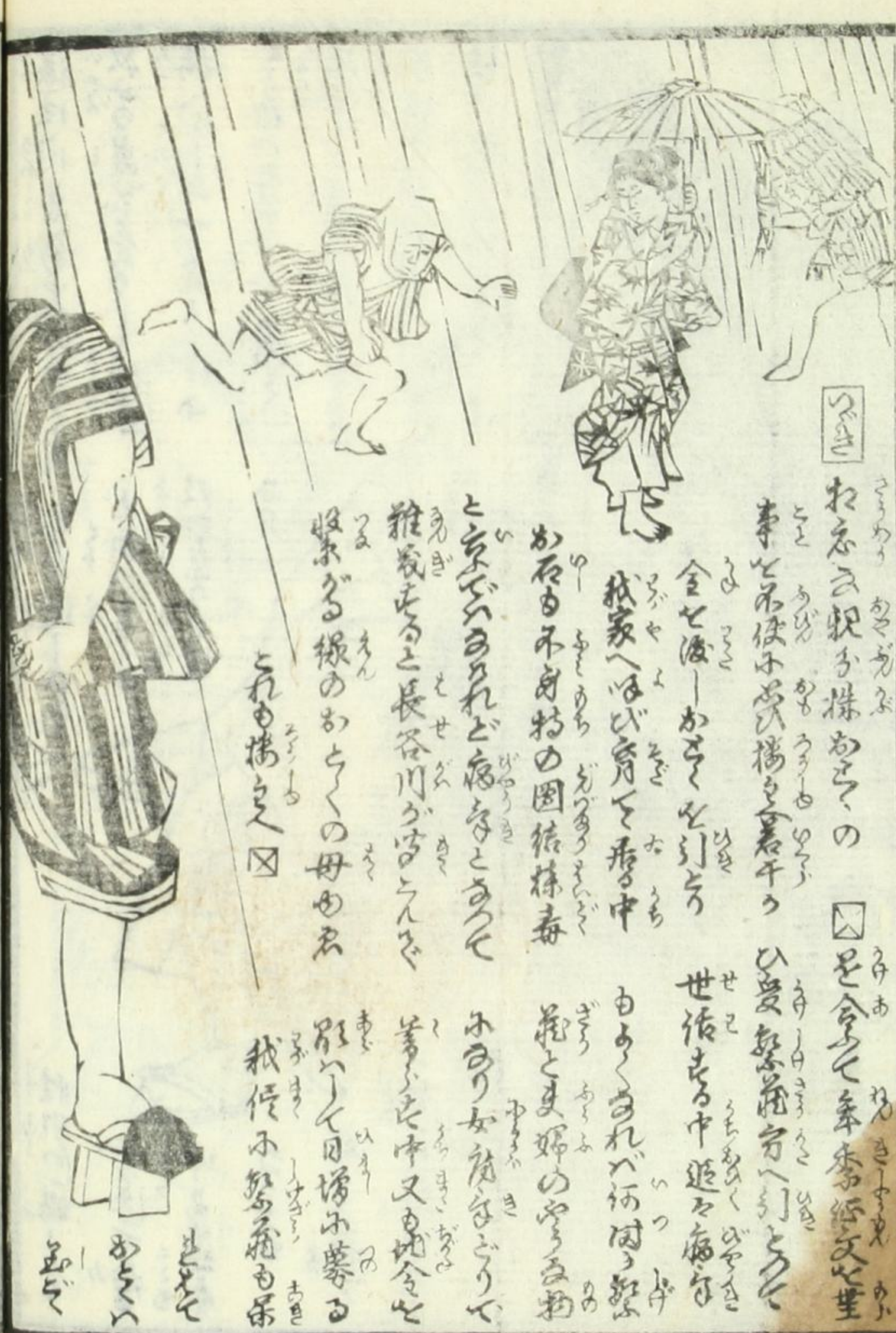
金花が赤右に飲うと



性根の娘  
昔は七層  
申すも幼を  
まがら由  
あまの徳  
心配に勤めを  
いひ  
おと  
長谷川  
のへあま米海町  
小ま町方の子  
先物わる



慈熱がかりのお  
 仍か悪の放逐に  
 あいせ  
 退治は  
 是れを以て  
 是れを以て  
 おとくを海川  
 の或る  
 妻へ  
 法  
 六次へ



ねえ云親を様おさの  
 事と名は小次郎を若千々  
 全と後一かそを引方  
 我家へはび育て形中  
 かる由不舟村の園信林毒  
 とまぶるれと病存とあると  
 雅哉とる之長谷川が宮とん  
 収束る板のおとくの母由  
 これも拂定之

世は中道な病存  
 由れこれへ何回か  
 花と夫婦のやうな物  
 小あり女房存とりて  
 等と中又も地合と  
 影へて日場小暮の  
 我候小勢存も保

世を  
 ねえ  
 ねえ  
 ねえ

丁なかとくがセツ

の幸ありされど儲ちを

を慈想ふおのゝ又おとくを林泉へ着

干うまうて妻惣返すもはるるの

ふきやとりの義忠忠人

お砂縁小妻勢へーが

けりぬくハ十一由七儀

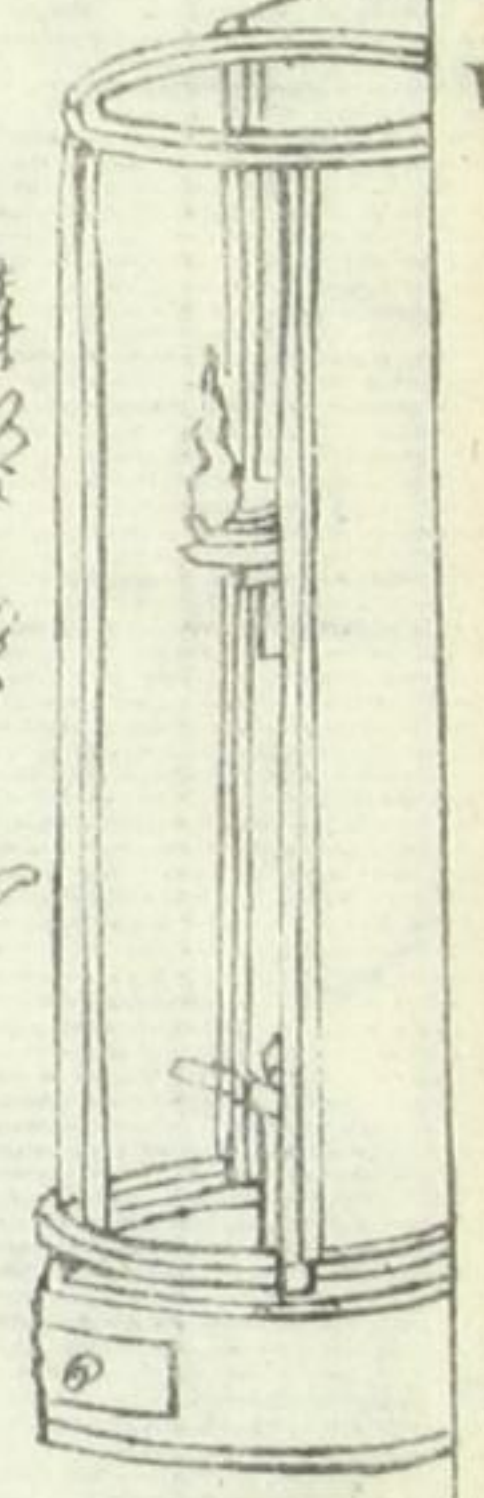
折遣や友朋中なが呵責り

杖由祝の為と対へ悲び着る

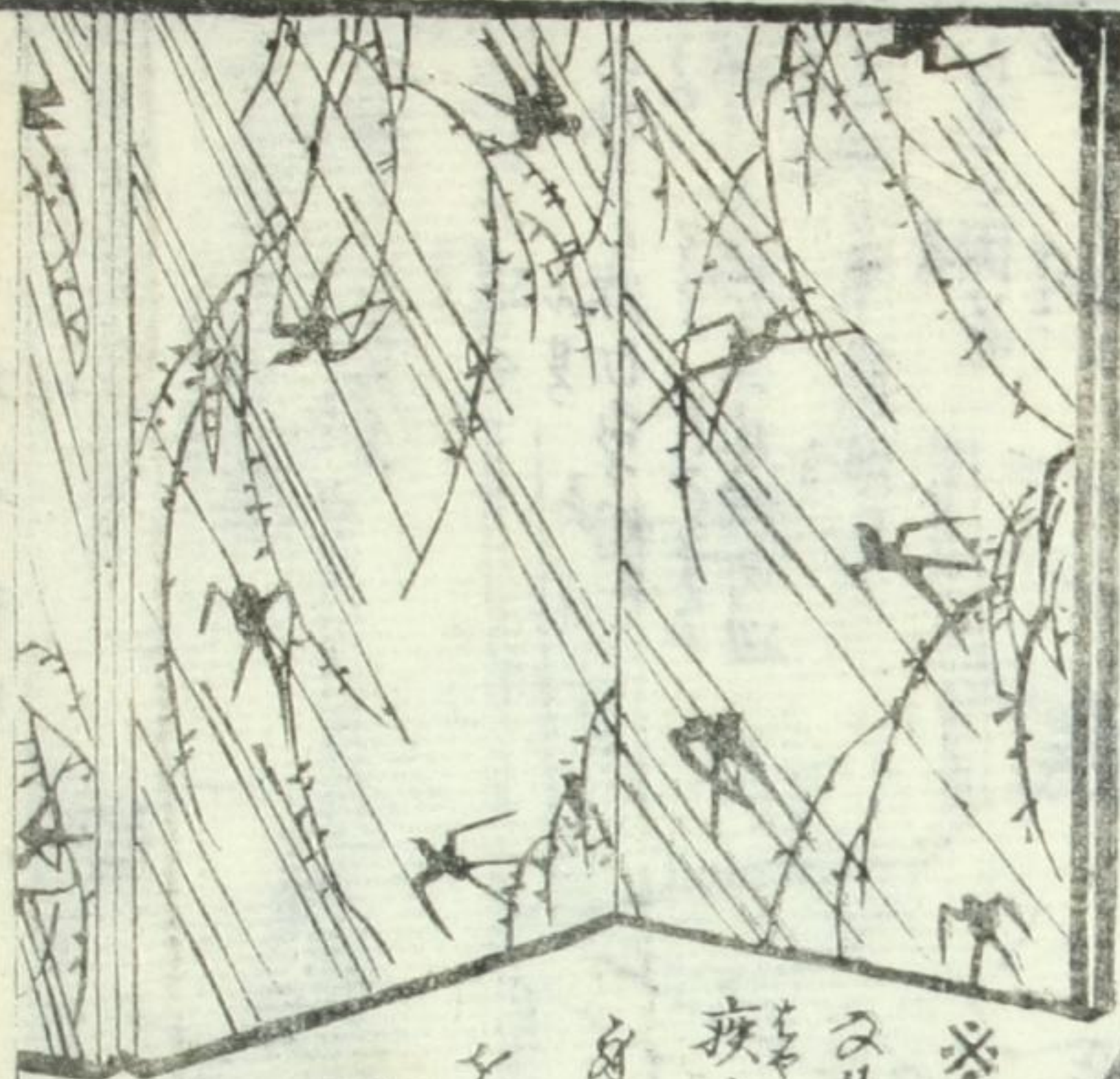
涙と肉へ飲く物めつ中あもる一は

上然ふごるまの父上今ハふておわ

やふ索ねあふてもニツの  
幸互いふあ世ま  
あして形さへ元知るる



或る四衣着へ  
俄に  
久  
久  
俄



又ハね  
疾く自由の  
身とありて廻り逢ふ日  
と嬉しくそとたけおきお  
非仏お祈りより外ありが  
憐る優しけ子にハ惚ホ  
母のお石ハ日毎の湯ホ

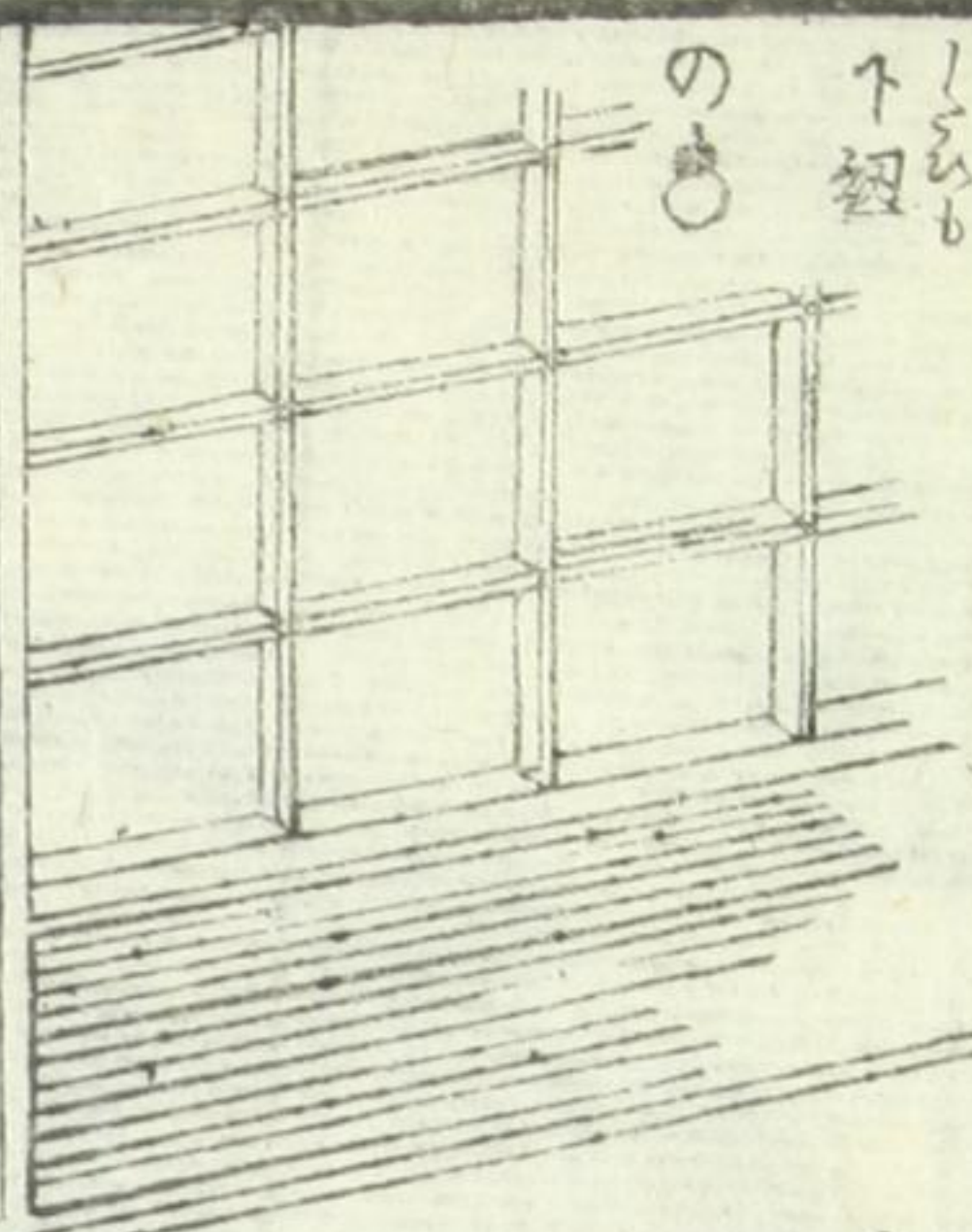
障り縁めくれ  
湯茶尼附小  
行きて  
志ハ暖る  
と待つ疾  
ふと屋敷  
取勇健男  
が兄うねて  
喉ご傘の内  
松ハ佛子町  
と極る老



かき初

下廻り解る

のち



暗時



加るは花をみくふこの  
あつたが二云りり  
知く候家の妻と  
あつたが源を  
世を子方あり  
わたりて  
何れ  
笑み  
かき初



料理屋へ連足はあつた  
果は腰に差まゝに夜と縁の始め  
とてあつく密をまゝに柳の  
男はたれぞとびくみけは借る所

かき初

候の



守川周重画

建の土地を天下を色海に  
カキク  
透る事由事由せ下附お二人りが  
コ松がゆせ

その中をどうやらさうさうと暇日な  
カレスセつとを送るる文件ハ僕お遊びてと  
うかくおらして居るうちお足徳  
ありらねば芳入事由勝天一アノ肝腹を  
られたい一大事ハ地と遊るが上なる  
親方が獄つことありてお身の上の劍の刃  
それにつけても芳さんお告げてともぐ  
後日密書に書付て四ツにまると  
主知んと何何うとぬぐ徳とあり文由  
中田登傲ハの智笑とやう華多の  
幾云所假名お浮名せりとなクツテト  
考の字笑お存が遊てといふこと言ひ  
そ尾一々  
路黄ハ位奴おユまさせおさるハ  
晩おアアウ  
告げて又おいらのさうさうと  
工オそせぬ  
ひとり云遊る機とを  
あかひらり

假名垣魯文閣

京文舎古文京綴

繪本太豊記之編

隅田川月梅若 四編

太閤記切附本々品 都々逸なぞ切付

御届明治十三年三月三日

日本橋区横山町二丁目十七番地  
大坂府平民

編輯人 渡邊 義方

日本橋區米沢町一丁目八番地

出版人 堤吉兵衛

東地本錦繪問屋



於石 莊傷  
冬兒立闇鳩  
編初

守川周重画圖



賀

賀

賀

賀

賀

賀



きりぎりす

かき吉板

おひし

初編下の巻

文系終

周系志



冬見立園嶋初編下之巻

假名垣魯文校閱  
京文舎文京著述

借もわりの一昔五帝よりとるに  
遊ん返事由名素より  
智小畏け方陰輝或る目さすの  
赤器が用事ありて  
たる返る衣敷道具と束縛ゆ  
行ちえ令も若干盗とそ  
候ひそるに漢家と抜け出  
てらさきあろい鳥羽玉の  
書とそは  
とも小まをとる東都の  
倉とねおろし  
行く先い千巻下  
下徳古河の知己とたより  
道と急いで  
まりりり  
〇  
まらえん  
まぢやア命づけ  
なまで来り  
方  
のうらた  
サ  
やア  
そ  
うと今夜の中  
小松戸  
ま  
や  
つ  
つ  
け  
る  
く  
つ  
ち  
や  
不  
素  
心  
と  
次

た  
り  
の  
下

方不衣



▲孫まを山やうと  
及之志き  
小松系利根  
の川流遠  
寿小

思つて心  
き宜き  
ひひ

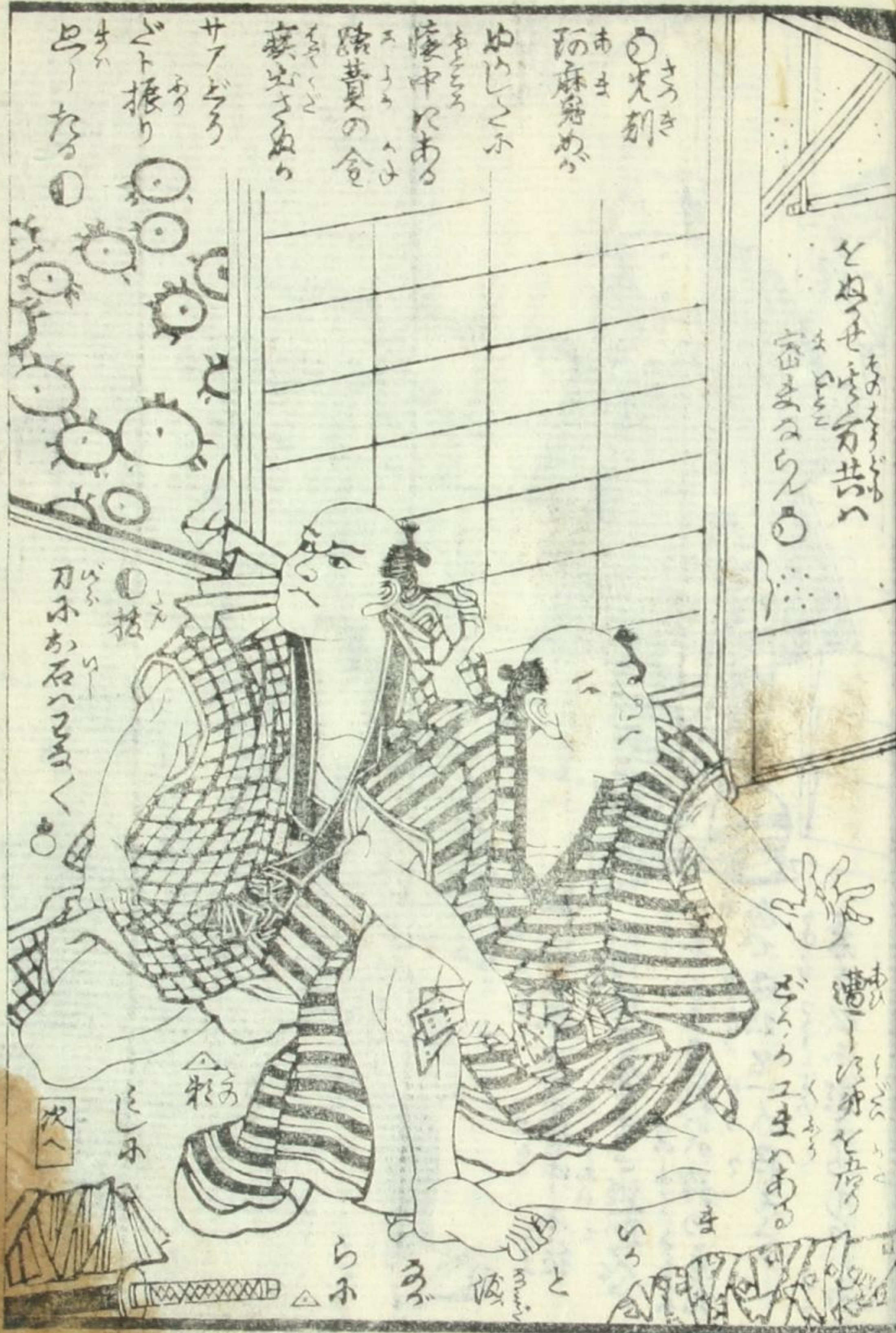


てまさらう子へ「そのやア  
ぬうアアまね  
かかあめりこ  
うりいま  
あいが一十月後  
い喰くるうまきこま  
中アアどろりあらうヨ  
さうちろとあひく

芳  
秋の  
善き  
晴き二人  
かあを  
隠す雲を  
まきれて  
ゆくは

ゆくは





の火刺  
あま  
阿麻呂めが  
ゆいしふ  
懐中にある  
踏費の合  
疾出さぬら  
サアどろ  
どろ振り  
とーたる

とぬせ  
密まららん

刀ふちるハコ  
か

漕ぎ  
さ  
と

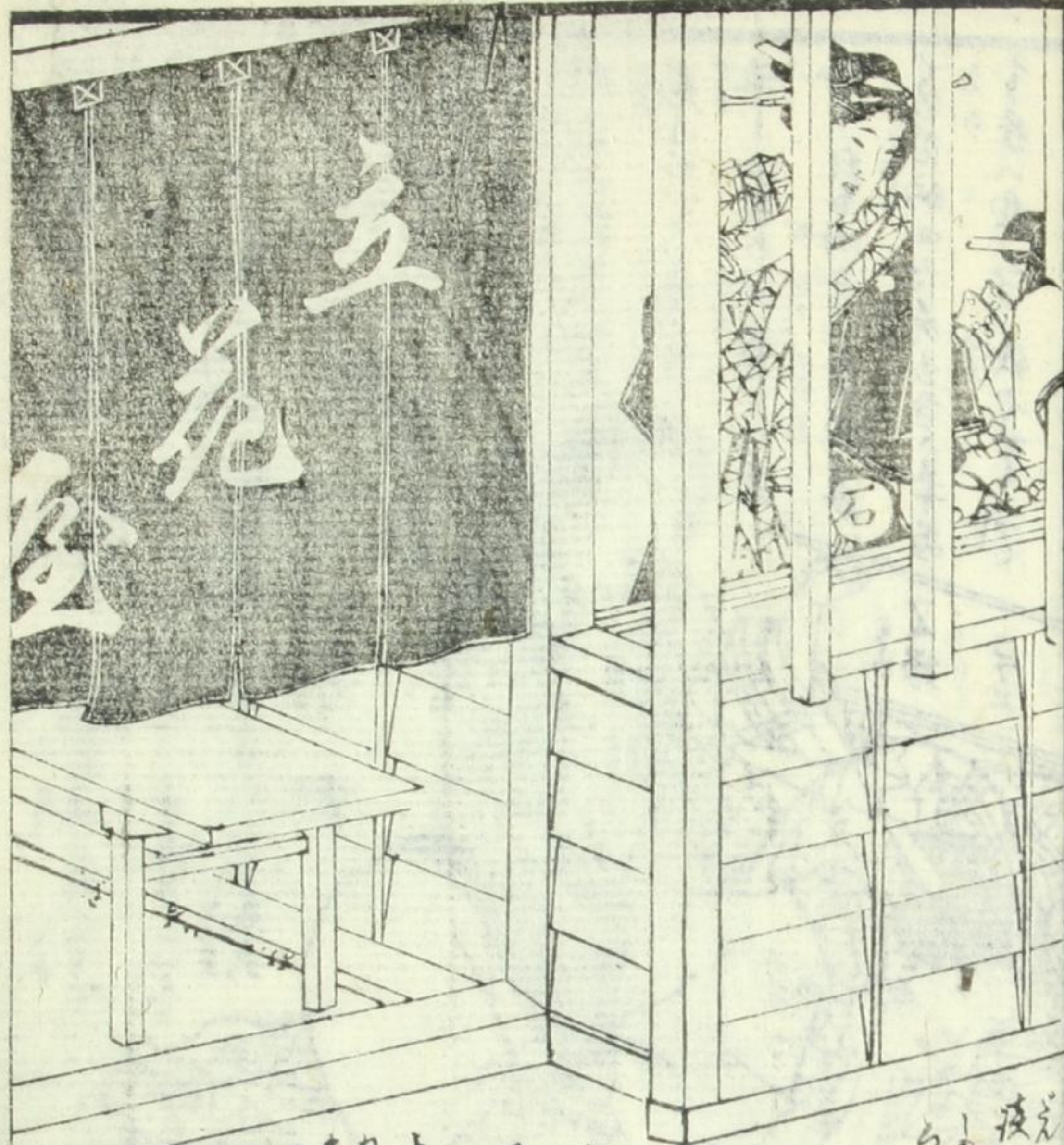


何卒  
お許し  
さされて下  
さのほしる麻

○震ひじの園の根も合ぬ  
大踊り芳五郎も気性お似て  
令来より後扱まて残らぬ  
利五郎  
丸たぐる命けりへ白浪  
助けやうきりく二人り  
失ろと

△冷方由はに  
うれぬは場の喧  
ぬく松の跡まを来り怪  
宮る縁店ふ入り返副小  
花  
途  
今更

か  
一



夜とて元母さうとあひ  
 一の活し小昔五弁へ  
 兼取及ふんあむれど  
 さかつこけ親長  
 去し昔芳とぬて其  
 是たふ已由移働ら  
 て車の内小運ひ小  
 ト烟小石由控方ま  
 車一ツ左の  
 波お  
 由七



とき  
 多らへ可て不便お  
 ナト

僻雲係小の脊中不後  
 お内儀さるもまご道ゆんご  
 車もふくれれば路のま花  
 なで端姑と一人抱えよ  
 兼々松小形もあればね

【五】 主君をへつふ決し田家の目元は由海にたれを金と

受れたるの同家へ引さらし世に足送る芳五郎一人り

笑ふ金とせぬ養へる二間の陸子開て入来る二人の若共

同老老儀と首座より三人り共大儀く候

侍の相つる己も有物へも前

遠とあひあつて何や

脚色どねんがけり

あつてくはせり

作一本石の河原屋とつて

知した由田舎へ幸迎ふ

ての目的四九虎もろく平五

今存へあつて一飲せり



これ移りたしあつて春秋先ぬ  
跡跡の終のどくくふ愛鉄ろ  
子保まふ結一夜の△

下巻に  
保る由  
練る由



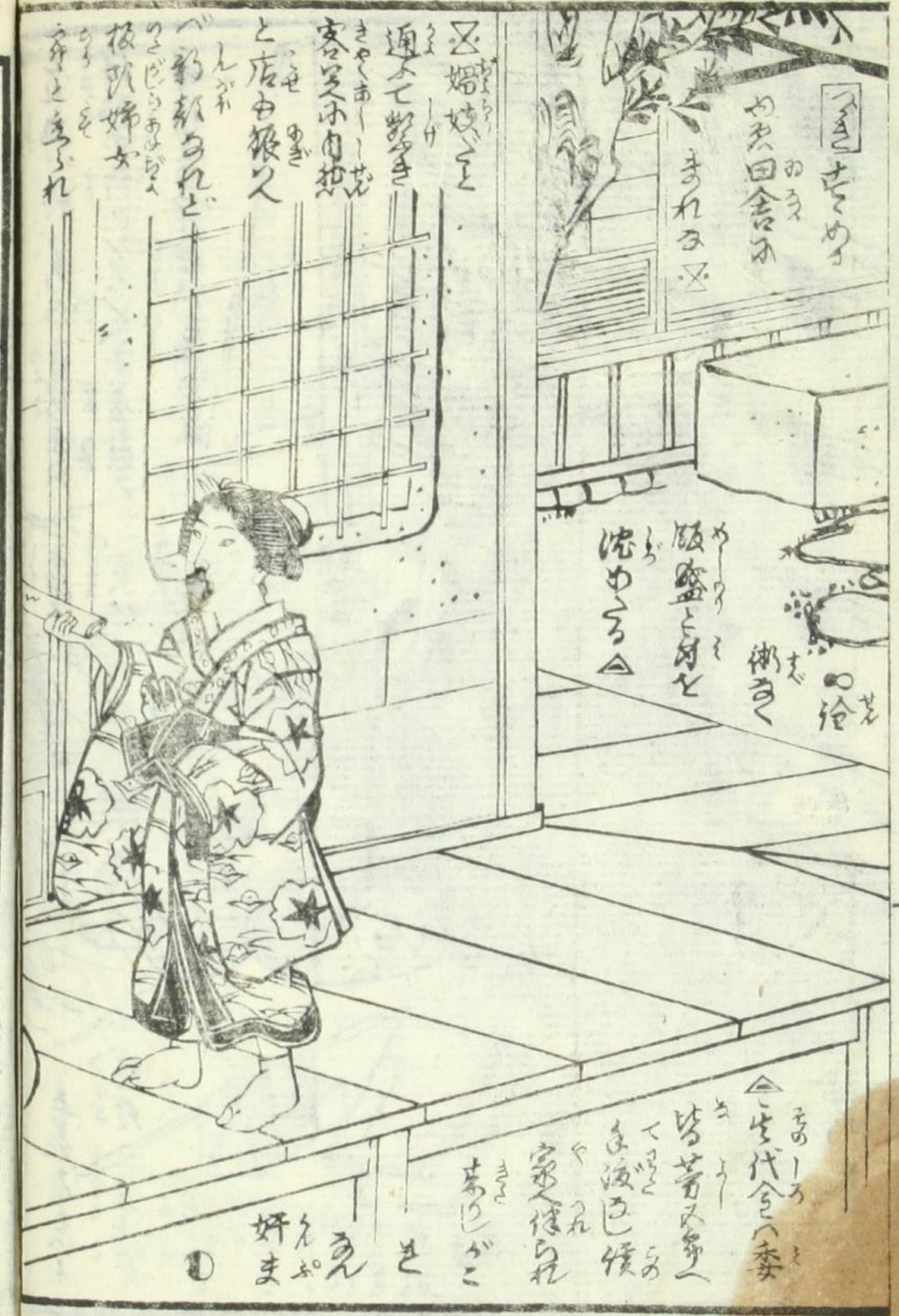
五花をといふ  
成程 出たえ  
嫁奴も  
多かる  
中に  
近以  
候  
家へ突如  
のふ懐といへる  
手取輝石  
幸坊の右瓶  
味淋糖で灰へ



て内外の  
威勢の  
つらうら  
○抑の  
かたとの  
と七五弁五弁  
小波むら  
まはるる  
まはるる  
身と洗め  
徳婦お石の  
あーて廿五弁と遊  
たる路次退割の

七  
中々  
英娘との  
お石の

○廿五弁  
えりけり奸  
針まると洗お石  
知つれど洗まて

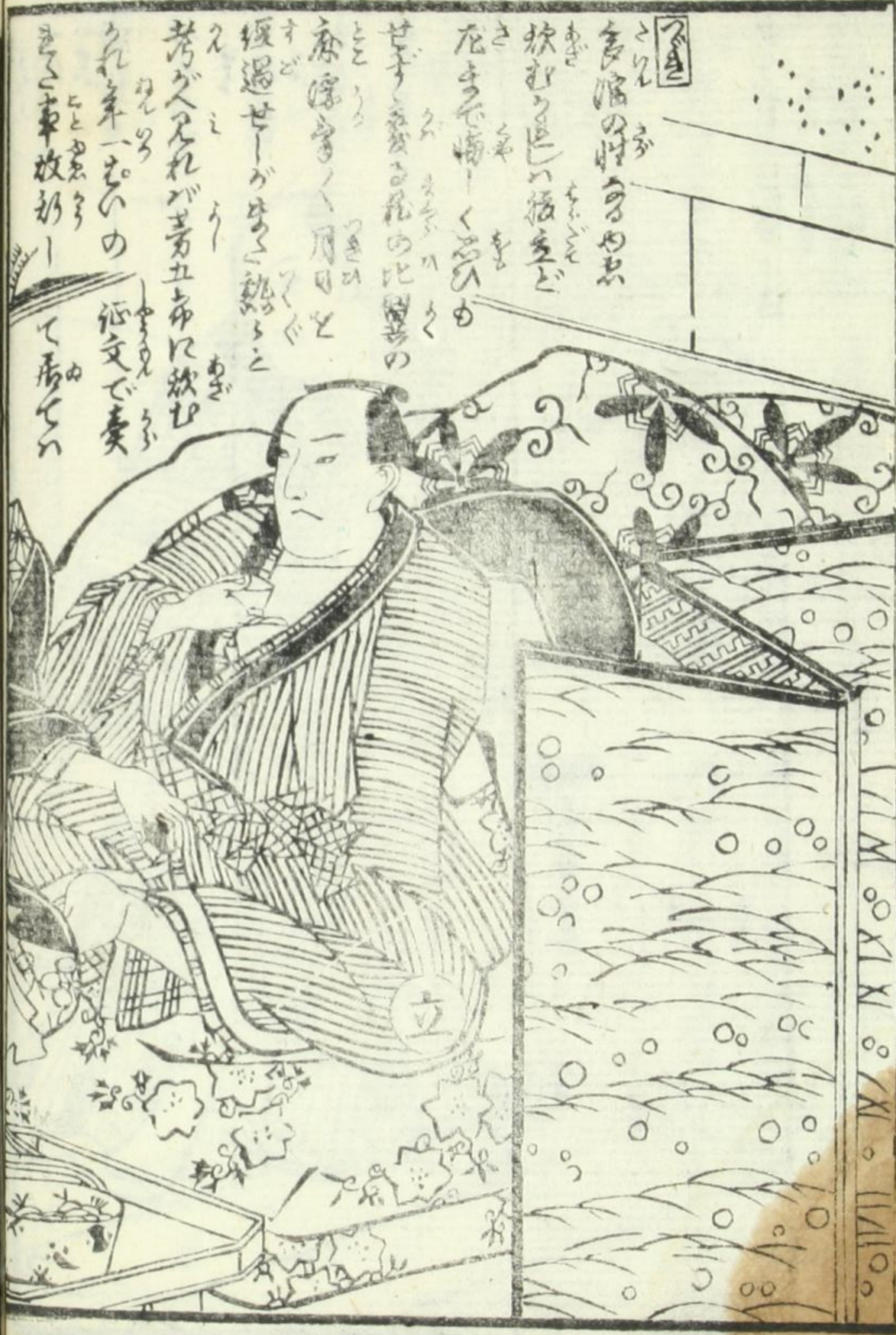


△婿嫁  
通て  
客定小内  
と店中  
へ新  
板取姉女  
弁とま

御  
洗め  
△

△生代金  
皆  
△

奸ま  
○



不意  
多量の財を内帑  
扶むるに極多と  
左まを悔くさひゆ  
せすもあまの比國の  
麻痺きく月日と  
極過せしがまゝ熱く  
考ぐんれば芳五布に放む  
くれ年一むの  
まゝ車放り  
て居ての



何日ともな  
怪ふらふす  
いまの事  
とりやも別と  
為る事  
ねとまゝも  
徐歩く虎  
小腕とりの  
あまの行儀  
のいまを花や  
の台個こそ  
よそが  
下十路の

れと扇虎の  
下りの権梅  
の物めまゝ  
色を心持と青く

女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり  
女形とあり





二編の巻首

二編の巻首  
小出

文

かてまが

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて



自由

自由  
さうさあ  
華の外  
ら幸季  
文

此画の分解

四五

何程う確のあつたり  
い程云が上策  
ん小態  
おと  
女  
機  
地  
あつて

御届 明治十三年三月三日

文京綴 横山町二丁目十七番地 大坂府平民 編輯人 渡辺幾方

周重画 米沢町一丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

新編西國奇談 廿編より 追々出版

薄緑娘あつなみ 八編より 追々出版

娘庭訓黄金の鶏 追々出版

御届 神田區仲町二丁目六番地

明治十一年十二月十七日 編輯人 篠田久次郎

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

地本錦繪問屋

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛

日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛



010190511982

冬倪立

三册之丙

